巻頭言

夢　追　人
Dream & Challenge

執行役員　羽　山　信　宏
Nobuhiro Hayama

「成せばなる，成さねばならぬ何事も，成さぬは人の思わざるなり。」

物事の結果は全て何らかの行為によって生ずるものであるが，その行動は人の思いの強さで大いに異なり，従って結果もその思いに大いに左右されると思う。

21世紀が明けてはや３年，21世紀をどんな世紀にするのか，その為に自動車に関わる我々技術者は何を思うべきか，課題は多々あろうが，少なくとも皆が共通に思っているのは，地球規模で環境に配慮した社会を構築するという課題であろう。

又，その答えがお客様の満足を得る技術・商品となり得る事も技術者は十分認識していると思う。

マツダは「マツダ地球環境憲章」を基本理念に，開発設計からリサイクルまでの全ての領域で独自技術を確立する取り組みに挑戦し続けている。

過去を振り返ってみると，1964年に総アルミ合金の白いエンジンを搭載したファミリアの販売，また当時，世界で最も厳しい排ガス規制と言われたマスキー法に適合する為の技術開発。マツダは，排ガスを再反応させる熱反応器（サーマルリアクター）方式の開発に取り組み，世界各国の自動車メーカがマスキー法基準の早期達成は困難だと表明する中，合衆国政府主催の公聴会において，マツダのロータリエンジンはマスキー法基準に合格することが可能であると答申した。1973年にファミリアロータリクーペに搭載しアメリカ合衆国への輸出を開始した。

近年では，レシプロエンジンや駆動系に関してもその技術力を認められ，フォード社への供給を実現してきた。

一方マツダは数年前に，コーポレートビジョン・ブランド戦略・プロダクトフィロソフィを鮮明に打ち出し，全企業活動のベクトルを一本化している。

このマツダの新たな意志を具現化した新型MPV，アテンザ，新型デミオにおいて，お客様の共感を得るという成果が現れてきている。

今春，マツダのブランドアイコンとして重要な意味を持つRX-8を投入した。

搭載するRENESISエンジンは，マツダ技術者の飽くなき挑戦魂を受け継いだ若い技術者達が，21世紀のロー

タリエンジンを目指し日夜挑戦し続けてきた成果である。

1961年，当時の松田恒次社長のロータリエンジン開発の決断。山本健一，当時部長をリーダーとした四十七士の「寝ても覚めても」の合言葉での難課題の克服。1991年，第59回ル・マン24時間レースでの優勝。

この研究開発を支えた技術者の飽くなき挑戦，その時々の難課題に挑戦し，「夢」を実現しようとする「REスピリット」。このようなスピリットはロータリエンジンのみではなく，勿論，レシプロエンジンや駆動系開発の中にも脈々と生き続けているのである。

自動車を取り巻く環境は時代とともに，排ガス対応，出力競争，燃費競争，環境対応……と変化を繰り返してきた。その度に燃焼技術，熱管理技術，排ガス処理技術，制御技術などが目覚しく進歩してきた。あわせて開発をサポートする技術革新も著しく，バーチャル開発も進んでいる。

世界経済停滞の中で，地球規模で環境を考えた社会を構築するという大きな課題に取り組み，そして低価格，高品質という顧客ニーズに応える為には，エンジン技術，サポート技術という有効な武器を駆使し，使いこなせるスキルが大切であることは言うまでもないが，それ以上に大切な事があると思う。

それは自然の輪廻という大きな流れの中に，自然態で存在することのできる自動車を創り出すという強い信念・夢を持ち，それを追い続けるエネルギーである。

技術者は皆この“心”，“志”を持っていると思う。自分達の子孫に美しいままの地球を残すという「夢」の為に微力ながらも貢献したいものである。